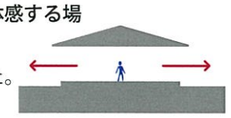
テーマ２　立地条件（景観・安全・風土等）やライフサイクルコスト及び環境負荷の低減に対する考え方

季節に応じた振る舞いが、無駄なく快適性と季節感を生み出す

テーマ１に示した「周辺環境そのものが、この地を訪れる大きな意義」という考えのもと、「建物の裏手」をつくらない、周辺環境全体が感じられ、周辺環境と呼応した建築を目指します。

■梅岩先生の原風景を五感で感じ、教えを体感する場

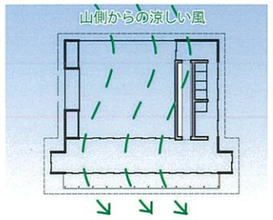
建物内部から周辺環境全体が感じられる様、
全周に向け開放が可能な建築を目指しました。



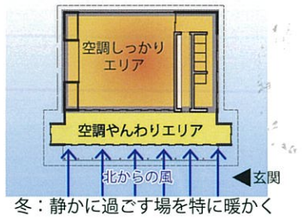
■季節に呼応し建物を設える

夏は南側の山から涼しい風が感じられます。山からの冷気を室内に取り込むことで中間期（冷房しない時期）を拡大します。
冬の日照があまり得られないことを考慮し、建物外皮の断熱性能は省エネ等級４程度を目指します。

空調に際し、座学も想定される道場と収蔵庫は「しっかり空調エリア」、動的な活動が主と想定される里山工房は「やんわり空調エリア」と分けて計画します。人の出入りによる外気流入や輻射熱を考慮し、空調負荷を軽減します。場所ごとに適切な温熱環境を設定することで、全体一様な計画に比べ環境負荷を抑えながら快適な場にできます。



初夏・初秋：中間期を拡大



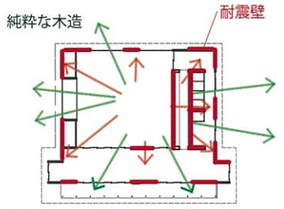
冬：静かに過ごす場を特に暖かく

季節により空間とその使い方が変化することで、空調費の倹約につながり、またその倹約の心が形として表れます。
日本の建築は古来より、季節ごとに設らいを変えることで快適性を確保し季節感を感じてきました。この知恵を踏襲した建築です。

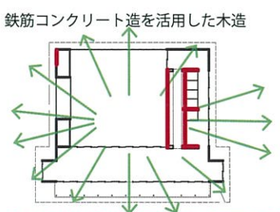
■木造と周辺環境との一体感を両立する

周辺環境に馴染み、環境負荷の低い木造を基本とし、基礎と床および収蔵庫周りの壁・天井のみ鉄筋コンクリート造とします。

純木造の建物は耐震性能を確保するための壁が内外に必要となり、開放的な空間づくりには限度があります。本計画では耐震性能を鉄筋コンクリート部分に担わせることで、木造の耐震壁が不要となり、四周に壁のない解放的な空間を実現します。また瓦葺きのような重量のある屋根を用いつつ、剣道など武道の学びにも充てることのできる大空間が無理なく実現可能です。



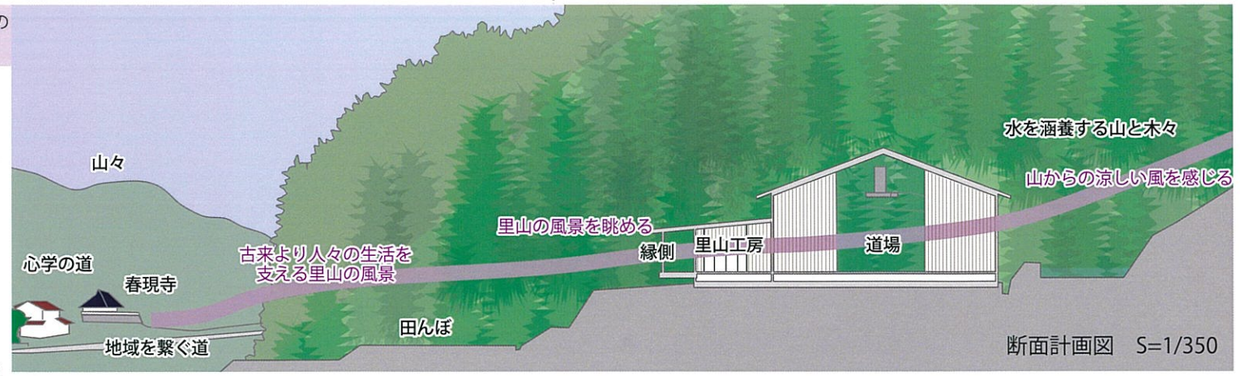
周辺の景観が遮られる部分が出てしまう

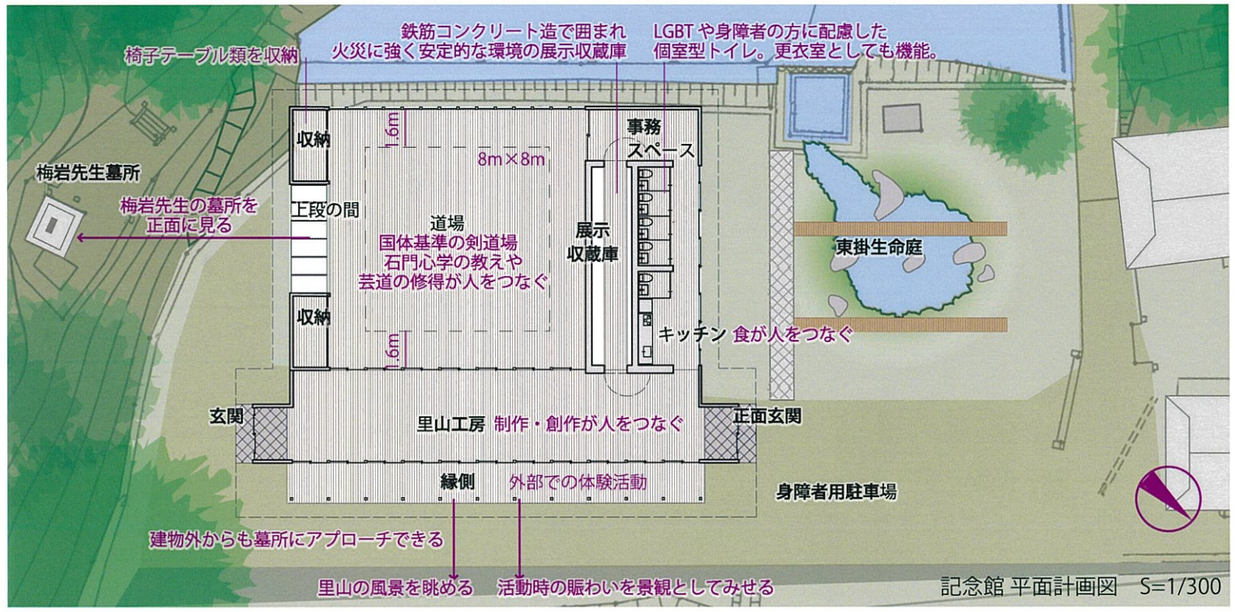


必要な方向に自由に窓や扉を設置できる

展示兼収蔵庫を囲むコンクリート壁は、収蔵品を火災や盗難から守るだけでなく、コンクリートの輻射熱により湿度や温度が安定し、収蔵に適した環境を実現、他の室の安定的な環境づくりにも貢献します。

室温を極端に上げ下げせず快適性を保つことで、電気料金を抑えます。安定的な温湿度環境は木造部分の結露を防ぎ耐久性が向上、ライフサイクルコスト低減につながります。

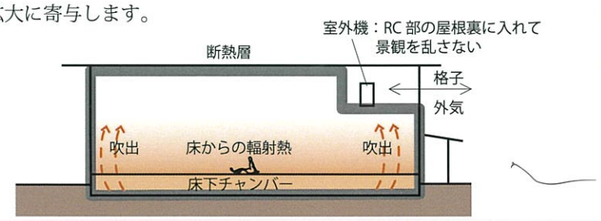




■快適と倹約を両立する、質素な空調計画

汎用空調器として最も高効率なヒートポンプエアコンを活用、室内機を床下に設置、空調しっかりエリアの床下をチャンバーとすることで、吹出口からの風だけでなく、床からの輻射熱も活かし天井の高い道場においても効果的な空調計画とします。

空調しっかりエリアを２段階に分け、１段階は床部分の吹き出しのみ、２段階目は床下チャンバーにより床吹き出しと床の輻射熱双方の空調とすることで、使い方にあわせて空調を制御し年間の空調負荷を低減します。鉄筋コンクリートの蓄熱効果が中間期（空調が不要な時期）の拡大に寄与します。



■規模とコスト

構造は木造を主体とし一部 RC 造とし耐震性能を確保します。
（建築基準法上の構造は鉄筋コンクリート造）

平屋建てとし、景観と調和し無理なくバリアフリーを実現します。

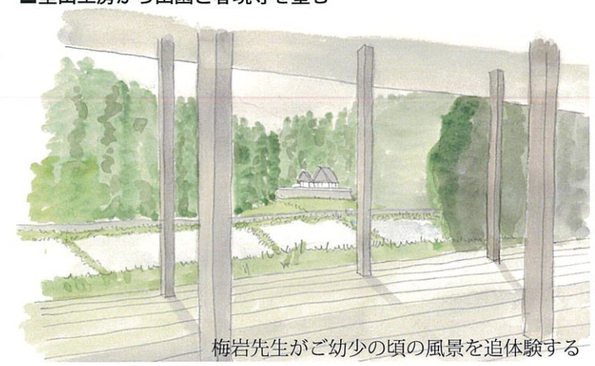
建築面積：398.53 ㎡　延床面積：392.51 ㎡

目標とする工事費を遵守し、将来にわたり維持に過度な負担がかからない様、面積をコンパクトにしながら有意義に活用いただける建築を目指し、業務に取り組ませていただきます。

■道場の床の間奥に梅岩先生の石碑を望む

梅岩先生を顕彰する心を育む（墓前祭の様子）

■里山工房から田園と春現寺を望む



梅岩先生がご幼少の頃の風景を追体験する

■多様な学習を提供できる場

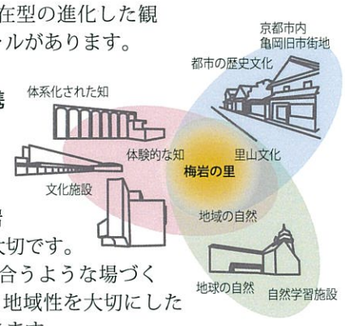
道場は国体の剣道場の基準を参照、12m 四方を確保、天井高さは 4.2m～6.5m 程度とすることで、座学と武道双方に活用できます。
床の間の先に梅岩先生の墓所を望み、学びの場で常に梅岩先生への顕彰の思いを育むことができます。
道場に併設して里山工房を設けます。里山工房はキッチンと連携し、周囲の自然環境を活かした生物や里山の暮らしの知恵など、手を使い体験的に学ぶ場として、ラフな使用にも耐えうる強靭な床とします。
襖を開け放てば道場と里山工房を一体的に使用することが可能です。

■京都市内との関係性

京都は言うまでもなく日本の代表的な観光都市です。しかし、人の生活は都市だけで成り立ってきたわけではありません。
日本の生活を支えてきた里山と都市としての京都市内、双方を知ることで日本文化をより深く体感的に理解できるものと考えます。
京都からのアクセスがよく、美しい里山の中に今も生活が営まれている梅岩先生の生誕地は、日本文化を伝える地としても大切な場となります。民泊で宿泊し梅岩の里で学ぶプログラムなど、地域の方のお力をお借りしながら、滞在型の進化した観光（後述）を実現するポテンシャルがあります。

■亀岡市内の学びの施設との連携

梅岩先生の教えを学ぶ教え場であることは第一に重要ですが、同時に地域の方が様々な目的で活用する中で梅岩先生するの教えにふれる機会も大切です。
市内のすでにある施設と活かし合うような場づくりとして、「体験的な知を育む、地域性を大切にした学びの場」を提案させていただきます。
具体的には東掛生命庭での生き物観察や、植生を学ぶ散策の講座、ワラを活用したしめ縄づくり、など、古来より営まれてきた里山の活動に関連する体験が、里山の自然を感じながら行えると、学びに広がりが生まれると考えます。



■心学の道との連携

道を巡る際、知識があると散策も充実した体験となります。
心学の道散策の拠点として、事前にレクチャを行ったり、参加者の懇親を深める場としても活用可能な計画としています。

■進化する「観光」：地域文化を体験し深く知る場の提供

SNS で多様な情報が得られる現代にあって、その地を実際に訪れることの価値とは何でしょうか。
有名な地を巡るスタンプラリー的な発想から、その地を深く知り自身の経験として蓄積できる学びとしての観光に、人々の関心は移行していると考えます。
観光に特化した施設よりむしろ、地域の人々が素顔で生き生きと暮らす場の醸成、その様な地域の活動・風土に溶けこめるような場づくり、それこそが魅力的な観光につながるのです。

観光都市の終焉を宣言したコペンハーゲンのコミュニティディナーの事例。旅行者も自由に参加でき、地域の人と交流できる。
（出典：https://www.ecozzeria.jp/series/column/column190625.html）

■地域社会との連携による地域コミュニティの活性化

上記より地域コミュニティ活性化への工夫は以前にもまして重要です。本計画では、生活にまつわる学びや寄合の場としても活用いただける様、大き目のキッチンをご提案します。

梅岩の里に愛着をもち、施設と景観を守っていきたいと思っていただけるような工夫を、関係者の皆さまとの対話を通じて見出していきたいと思います。